



山口の万歳が被っていた鶏頭の烏帽子（部分、一般郷土資料 1704、部分）

文書館 もんじょかん 動物記



書庫に棲む動物たち

10

西

にわとり

鶏をまねる芸能

写真上・右の烏帽子は、おそらく大内氏の時代から山口を中心に正月の門付け（かどつけ）にまわった万歳（まんざい）がかぶっていたものです。彼らは家々でその家を寿ぐ祝言を唱え、歌舞しました。

彼らは江戸時代には、萩城及び城下にも門付けに出るようになり、武士の家にも上がりこんでいました。鶏頭をかたどった烏帽子の下賜や修理も、藩の重臣によって行われていたようです。

彼らは大内氏の先祖と一緒に渡来したという由緒をもつ陰陽師の末裔だと考えられており、山口市大内御堀の乗福寺の保護を受けていました（毛利家文庫遠用物近世後期200）。右下の写真は彼らの万歳の様子を描いたものです。

またこれとは別に、山口県域で行われている（いた）風流のなかに、二羽の鶏に扮した「胴取」が頭上に鶏を模した切形などを戴き、締太鼓を胸にして鬪鶏の仕草をする、「楽踊」

「腰輪踊」などとよばれる特徴ある芸能が数多くあります（裏面参照）。

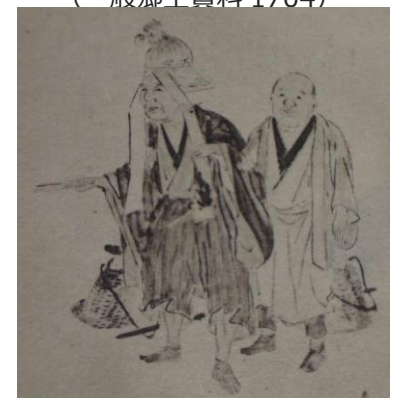
この芸能は山口県独特と言ってもよいほどで、周辺の他県にも類似のものを見いだすことができません。『山口県史民俗編』でも一章をさいてこの踊りの伝承を記述しています（第Ⅱ編第四章）。

鶏は夜明けを告げる「陽＝昼」の動物であり、「陰＝夜」を象徴する「魔」を追い払う力があるとされていました。また同様に、「陽＝太陽」の象徴として五穀豊穡の利益につながると考えられていたようです。また、この踊りには、牛馬の息災をうたうものも数多くあります。

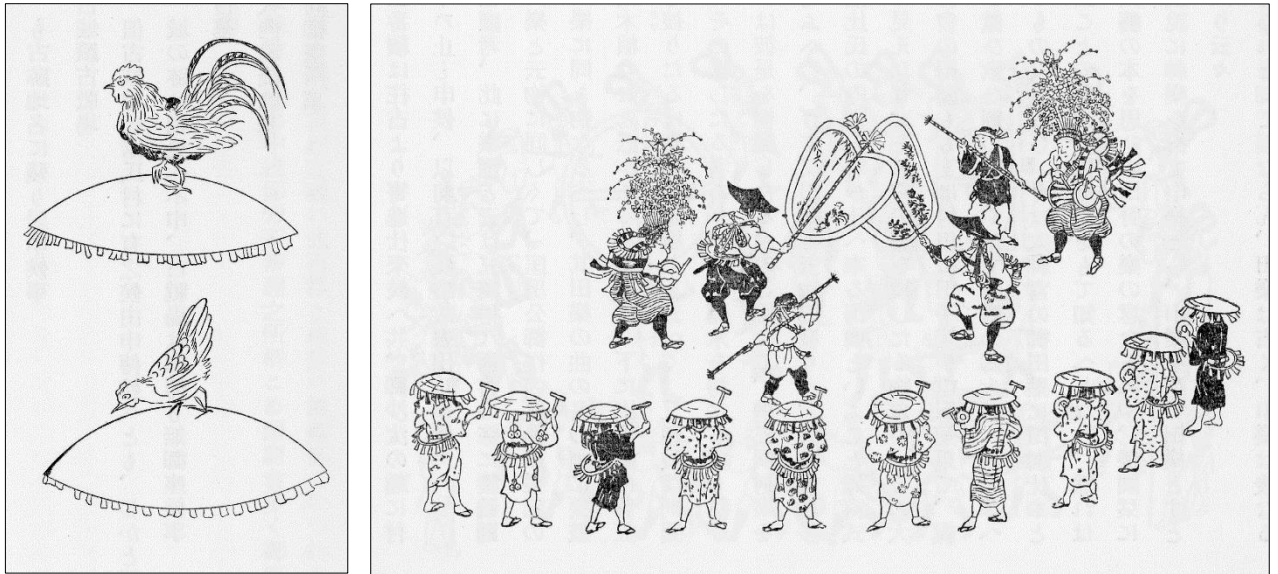
しかしそれにしても、なぜこの踊りが山口県に特徴的に分布しているのでしょうか。大内氏が伊勢神宮から勧請した高嶺大神宮の存在の影響や大陸との関係も推測されていますが、いまのところ謎というしかないようです。



(一般郷土資料 1704)



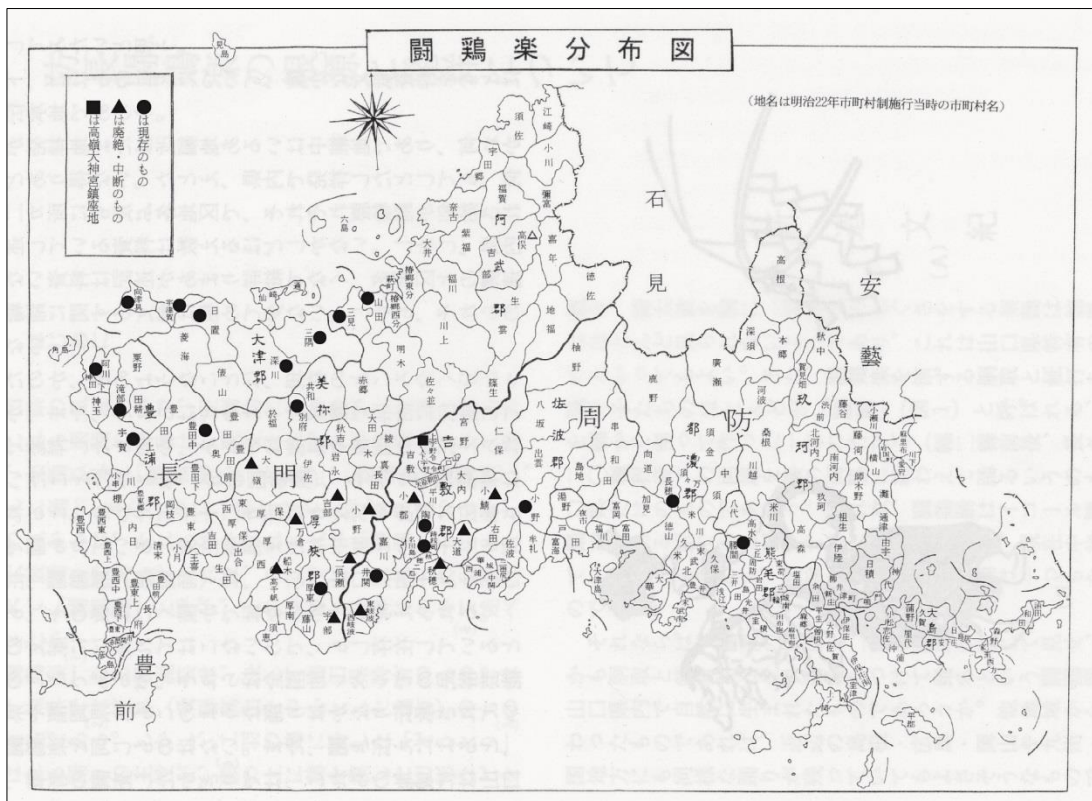
(個人蔵。『森寛齋遺作図録』恩賜京都博物館、1944より部分転載)



左：金淵山龍神社（奥阿武宰判片俣村）の「念仏踊」に用いられた花笠の図。踊りは特定の家筋によって担われ、雨乞いや牛馬安全のために執行されました。「鶏は紙にて鶏を一つがひ拵え、華笠の上に付たるを着、胸へ羯鼓をつけ、腰輪とて五色の紙を切下ケたる大きな輪を腰にさし、肩よりたくりやうなるものにて釣つけ袴を着す」というでたちでした。

右：赤崎社（前大津宰判深河村）に伝わる「楽踊」の様子。踊りの一つに「闘鶏」があります。踊り手は鶏の形をかぶっていませんが、左側の大きな団扇状のものに鶏が描かれています。（左右いずれも「防長風土注進案」より）

「楽踊」「腰輪踊」など鶏をまねる踊りの分布



新造文紀「防長闘鶏楽の根源と発祥について」（山口県地方史研究 第 83 号、2000）より作成